平成 26 年 6 月 21 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
平成 26 年度第 5 回

第三次世界大戦の危機

6 月１５日に大阪で行われた論語普及会主催の論語寺子屋サミットでお話をして参りました。各地で素読を中心に論語を教えている指導者の方々が 70 人くらい集まりました。中斎塾フォーラムから 11 名の方にお出で戴きました。感謝申し上げます。

私の講話の前に、論語普及会の学監である伊與田覚先生がお話をされました。当日は伊與田先生の 99 歳（数え）の誕生日でした。懇親会で先生が挨拶された中で印象に残ったことがありました。先生の挨拶が時間をオーバーしていましたので司会者が知らせに行くと、ニコニコと穏やかに話をされていた先生がちょっと気色ばまれて、「私は命を懸けて喋っているのだから止めるな」と言われた。先生が命を懸けて話しておられる内容の中で、「世間を見ていると、第三次世界大戦が始まる兆候を非常に感じる。今ここに居られる方はリーダーシップをとって、そうならないように世間を誘導して欲しい」と言われた。第三次世界大戦が起きる可能性が高いということを命を懸けてこの場で言っておきたい、という言葉が強く印象に残りました。

伊與田先生は、論語はご飯だから毎日食べないといけないとも言っておられました。先生は 7 歳から論語を習い始めて、もう 90 年以上も論語というご飯を食べ続けているそうです。そのきっかけは、7 歳の時にお母様を亡くされ、泣き暮らしているのを見かねて、ご家族が論語の素読を勧めたのだそうです。7 歳の少年が意味も分からず論語の素読をすることによって、母親の死を忘れることが出来た。忘れるのに 40 年かかったということでした。

論語普及会では伊與田先生の『仮名論語』をテキストにしています。『仮名論語』は先生が毎日筆で浄書し、半年かけて作られたとお聞きしました。寺子屋サミットでの素読は、皆さん＜川が流れるように一定のリズム＞で読んでいました。自然と暗記するようにやっていると感じました。

先程は井澤幹事が素読をされましたが、抑揚のある素読でようございました。素読は自分自身のリズムを作られるとよろしいでしょう。無声映画の弁士が解説するような調子で自分でイメージを浮かべながら読むと、自然と人がその中に入り込んできます。鍛錬とい

う言葉がありますが、宮本武蔵の言う「鍛」は 1000 日、「錬」は 10000 日の稽古です。どうぞ、そのように何度も論語を読み込んでください。

知足の入口

中斎塾フォーラムの基本哲学は知足です。今朝、津久井さんから赤城の植栽の提案書を戴きました。良い提案書を作ろうという氣持ちは感じるのですが、相手の立場に立たないとなかなかよいものは出来ません。相手の立場に立って提案書や見積書を書く、相手の状況を考えながら話をすることが必要です。足るを知るということは、自分の想いだけで満足するのではなくて、人と人との交わりの中で生きていますから、相手の事を考える必要があるなと強く思うようになりました。

先程の伊與田先生は 99 歳ですが、お話させて戴いた時に、「私の周りは皆 99 歳まで生きていました」とおっしゃいました。宇野精一先生、宇野哲人先生、諸橋轍次先生しかり。やはり長生きした先生は、長生きした先生同士でのお付き合いがあるのですね。長生きされる方をみると、いくつか共通点があるようです。人と会うのが好きですね。とくに若い人とおしゃべりする事が好きです。それからよく歩くし、よく食べ、よく寝る。いつでもどこでも寝られることです。そういう心境でいくと、多分「知足」ということの実践に繋がると思います。知足の入口は、そういう長生きの秘訣からも見えてきます。

恒例の質問

では、恒例の質問を致します。

○　今月に入って、比較的嘘をつかなかった方

今テレビで国会中継を放送していますが、この中で誰が閻魔さまに舌を抜かれるかなと思って見ています。河野談話をめぐる韓国とのやり取りをみると、どうも韓国の分が悪いようです。ですから韓国の政治家の方が先に舌を抜かれますね。しかしながら外交に関しては水面下の交渉をそんなに早く話し公表するものではありません。日本の政府もかなり禁じ手を使いだしたと思っています。よほど韓国のやり方に腹を据えかねているのでしょう。

○　今月に入って、良い日が続いている方

良い日が続くのは、自分の心持ち次第です。

○　今月に入って、有難うと言い・有難うと言われることが多かったとしみじみ思う方

しみじみ「有難う」と言われると良い日です。ならば自分も、上っ面でなく相手の心に余韻が残るような良い「有難う」を言えたら良いですね。

○　今月に入って、毎日健康法を実践した方

健康法も自分の身体に合わなくなってきたと感じたら、見直しするとよろしいでしょう。

○　昨晩眠る時に、明日以降のことを過去形でイメージ出来た方・近未来を過去形でイメージ出来た方

論語の視点

では、論語に参ります。本日は顔淵篇 22～24 です。

【二十二】樊遅　仁を問う。子曰く、人を愛すと。知を問う。子曰く、人を知ると。樊遅未だ達せず。子曰く、直きを挙げて諸を枉れるに錯けば、能く枉れる者をして直からしむと。樊遅　退きて子夏を見て曰く、郷に吾　夫子に見えて知を問いしに、子曰く、直きを挙げて諸を枉れるに錯けば、能く枉れる者をして直からしむと。何の謂ぞやと。子夏曰く、富めるかな言や。舜　天下を有ち、衆に選びて皐陶を挙げ、不仁者遠ざかる。湯　天下を有ち、衆に選びて伊尹を挙げ、不仁者遠ざかると。

このとき樊遅は 28 歳、孔子が 64 歳です。

樊遅が孔子に「仁とは何でしょうか」と聞きました。

孔子が「人を愛することだよ」と答えました。博愛の愛です。

さらに「知とは何でしょうか」と聞きしました。

孔子が「人を知ることだ」と答えました。

この時の樊遅の理解は、知るとはどういう人物かを観察して覚えるということだと思っているので、樊遅にはよく分からなかった。そこで孔子が説明を加えました。

「正直で清廉潔白な者をトップにして不正直者の上におけば、下の者は上を見倣って正直になっていくものだ。」

樊遅は退座し子夏に会って聞きました。「先生にお眼にかかって、知についてお聞きしたところ、先生は『正直者をトップにすれば、不正直者を正直にすることが出来る』とおっしゃった。どういう意味だろうか。」

子夏はこの時 20 歳ですから、年上の樊遅に敬意を表しつつ言いました。「それは良い言葉を聞かれましたね。その昔、舜が天下をたもった理由は、正直な皐陶という人物を司法大臣に挙げたので、不善な人間はだんだんいなくなりました。湯王が天下をたもった時には、正直な伊尹という人物を内閣総理大臣にしました。すると同じく不仁者が遠ざかっていったのです。」

トップに素晴らしい人物を置けば、皆それを真似するようになる。だから自分自身の人格を磨きましょう、とここは理解すればよろしいでしょう。

【二十三】子貢　友を問う。子曰く、忠告して善く之を道き、不可なれば則ち止む。自らを辱しむること毋かれと。

馬を水辺まで連れていくことは出来ても水を飲ませることはできないという諺がありますが、それを考えながら読めばよいと思います。子貢は非常に才能豊か、口八丁手八丁でお金を稼ぐ能力がありました。当然、金目当てのような友人も沢山集まってくる。それを孔子はハラハラしながら見ていたのでしょう。実際には子貢は孔子が考えるよりもずっと中身の濃い人物だったと思います。

子貢が孔子に聞きました。「友人にはどういう人間が良いのでしょうか」

孔子が言いました。「真心を持って相手にアドバイスし、善を導き出すようにしなさい。もしそれが聞き入られないようであれば、それ以上強く言わない方が良い。それ以上は自分を辱める結果になるからやめなさい。」

友人は取捨選択しなさいと教えています。

人と人とのつながりということで葉書の活用の仕方をご紹介します。私は四季便りを年に 4 回出しています。年賀状のようなものですが、これは結構役に立ちます。先日、会社の若い役員に年賀状を何枚書いているか聞いたところ、30 枚と答えたので情けなくなりました。300 枚は書くように言いました。今朝の新聞に載っていた文科省のアンケートの結果では、小学校 6 年生の半数の児童はきちんと葉書が書けないそうです。日本人は残念ながらそういうレベルに落ちてしまっています。

【二十四】曾子曰く、君子は文を以て友を会し、友を以て仁を輔く。

曾子は父親が孔子の弟子です。自分の父親が教わっていた孔子を仰ぎ見ていると考えて下さい。

曾子が言いました。「人物といわれる者は、学問の集まりを催し友人同士で学びを深めていく、そういう付き合いをするものだ。友人の助けを借りて人物を磨いてゆけばよい。」

友人の大切さを言っています。翻って、皆さんは友達が何人くらいいるでしょうか。そ

の中で、この部分について自分は彼に及ばないという友達が、沢山いるとよろしいですね。自分が必要だと思う専門家を友人・知人に作っておくと良いと思っています。最近、それに農家の方が入っていないと大変だと思うようになりました。せいぜい 10 人くらい、しかもただ単に知っているという間柄でなく、非常に親しい友達関係を作っておく。３．１１のような災害が起きた時にすぐに連絡が取りあえて、遠隔地から駆けつけてくれるとか知恵を貸してくれるような、親しいお付き合いしておくとよいと思います。

六中観

本日のテーマは「六中観」です。「りくちゅうかん」と読みます。なぜ「ろくちゅうかん」と読まないのかずっと調べて、答えが出るまで何十年もかかりました。分かったら簡単なことでした。石川梅次郎先生曰く、安岡先生が小さい頃にそういうふうに教わったからということでした。その時代は、六を「りく」とよむのが普通だったそうです。

忙中有閑・・・忙しい時ほど時間をやり繰りし、自分の心を鎮めて平常心を保つ。忙しい時ほどそういう時間を作りなさいということです。忙中とは、物理的に忙しいだけではなく、心がせわしく落ち着いていないという意味もあります。先ほどお話した河野談話に関する調整をみても、韓国は頭に血が上っているから、日本を叩こうとする意図ばかりが見えています。そういう時ほど韓国の政治家は、心を鎮めてゆっくり判断する時間を持つべきでしょう。

ちなみに「六中観」は、安岡正篤先生が日中忙しくて厄介な事が多く精神的空虚に陥った時に、この文字を見て心を癒したと言われています。安岡正篤先生ほどの人物でも精神的空虚に陥ることがあるのかと、非常に親しみを感じます。

苦中有楽・・・苦しくて苦しくてどうにもならない、苦しみ抜いたところに、ちょっとした楽しみを見つける。苦しみの中に何か希望を見出しましょう。

死中有活・・・死ぬほどの目に会っても、その中から活力を出して生きる喜びを見出して生きていきましょう。

苦中有楽も死中有活も、自分自身を奮い立たせるということです。今朝の新聞に、「個人消費の判断」という記事がありました。アベノミクスによって景氣が良くなった、給料が上がった、儲かった…という話が新聞に沢山出ています。新聞は、苦しみの中に希望の灯を見出そうという書き方をしているのだと思います。しかし実態を見れば儲かっているのは大企業の一部です。消費税のアップも輸出型の大企業には消費税が還付されますから、これも良かった良かったとなる。でも一般の家計は苦しい。税金が上がり、物価も上がる。どんどん家計を直撃しますから、相当苦しくなってくる。家内のお供をしてスーパーに行

って感じたのは、最近は単価が上がって中身が減っている。これは食品だけではありません。押しなべて皆そういう流れになっています。大多数を占める国民の財布が少しも潤わない。安倍さん自身も、「中小企業の方々の給料が上がらなければアベノミクスは失敗だ」と最初に言っていますから、秋ごろになるとアベノミクスはだめじゃないかと新聞が叩きはじめると思っています。消費税 10%の判断を年末にするということですから、その判断をした直後から、ドン、ドンと景氣が悪くなってくると思います。

壺中有天・・・壺中の天とは、楽しくて楽しくて時間が経つのも忘れる、今の時代は趣味ですね。目が回るほど忙しいとか悩み苦しみを持っている人は、時々自分の心の中に壺中の天を持ちなさいということです。壺中の天の出典は、『後漢書』の費長房の話です。昔、中国に費長房という役人が何気なく窓から往来を眺めていると、一人の老人が壺を売っている。日が暮れる頃になると老人は店をたたんで壷の中にパッと入ってしまった。これはきっと仙人に違いないと思って、弟子にしてくれるよう頼んだ。老人と一緒に壺の中へ入って行くと、そこには金殿玉楼があって宴会をしている。時間が経つのも忘れて実に楽しい思いをした・・・という話です。

安岡先生は自分自身の心を磨く時間、楽しいと思える時間、心が癒せる時間を持ちなさいということで「壺中の天」と言ったわけです。

意中有人・・・意中人とは人材です。安岡先生は時の首相に、自分が内閣総理大臣になったら大臣は誰にするか腹の中に持っていなければいけない、と指南していました。日頃から自分がしかるべきポストに就いたら、この仕事は誰に頼もうと決めていなければいけない。そのためには日頃から人脈を確保しておかなければいけません。また、自分が人さまから頼られる人間（意中人）になれるとよろしいですね。

服中有書・・・心の中に哲学をつくりなさいということです。書とは哲学です。人間が人間としての道をまっとうするには、哲学が肚に収まっていなければいけません。政治家は特にそうあって欲しいですが、今はそういう政治家は少ないようです。

中斎塾フォーラムでは、書（哲学）は「足るを知る」一つです。あとは全部それを説明するためにあると思っています。ただ「足るを知る」といっても、体験しないと染み込みません。哲学は判断基準です。

「六中観」については、悟道会で７年間毎月勉強しました。私はその前からですから、十数年はずっと追いかけています。何か一つのことを追いかけて、ものになるまでには 10 年くらいは要りますね。ただ聞いているだけでも、10 年聞いていれば大体ものになってくる。自然と身体に染み込んできます。

最後に、時事評論で新聞の読み方だけ申します。私は新聞を見ていて氣になった記事には、どんどん丸を付けて行きます。そして何回か見直しをします。そうすると表面で書いてあるものだけでなくて、その裏側にあるものを自然と見るようになってきます。記者の本音が透けて見えて来たら、今度は他の新聞と照らし合わせをしてみる。少なくとも３紙くらい読んでいると、浮かんで来ます。政権側の意図が見えてくるし、他の国の意図が見えてくるし、マスコミが置かれている立場も見えてきます。そうやって見えてきたものを寝かしておくと発酵して、突如として何かが閃きます。それが自分自身の判断基準の大きなもとになる。そういう知識が生まれます。それを知恵と言います。新聞も読みこなしていくと知恵に変わりますから、どうぞそのような読み方をして戴きたいと思います。